山梨大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要 2，81－88，1994

社会的自立をめざす日常生活の指導

Activities of Daily Life for Children's Social Indipendence

熊畑允子 Nobuko KUMAHATA　山下弘子 Hiroko YAMASHITA　山口正仁 Masahito YAMAGUCHI
青木洋子 Yooko AOKI　坂本一聡 Kazutoshi SAKAMOTO　植手徳子 Noriko UETE
望月千晶 Chiaki MOCHIZUKI　大友貴雄 Takao OOTOMO　齊藤誠 Makoto SAITO
長田佳美 Yoshimi OSADA　守木智 Satoshi MORIKI

人が生を得た初めの段階では，眠り，食し，排泄することから生活は始まる．発達に伴ってこの基本に着脱衣や手洗い，歯磨き…など日常生活の内容に広がりを見せ，諸活動が求められるようになっていく．人の場合には，普通は身体・精神のバランスのとれた発達の中で，何気なくクリアーされ，一つずつ行動の様式を身につけていくことになる．そして，その大部分は家庭教育の範疇によるところが大きい．

しかし，養護学校（精神薄弱）では，多くのこどもたちが，基本的な生活をするための行動に支障をきたしている場合が多い．たとえば，小学部では，食べることの意欲の欠如，排泄の認知が困難である，サインが出せない，ボタンを指先で摑めない，前後左右の弁別ができない等々から高等部でのことば遣いや礼儀作法，身なりなど社会自立に向けての多くの困難な状況を持っているといってよい．

そこで，日常の生活力を高めることをめざして，小学部・中学部・高等部を通しての，教育課程において，「日常生活の指導」として領域・教科を合わせた指導が位置付けられている．

ここでは将来のより自立的な生活づくりを目標に，各学部での発達段階に応じた実践を報告する．

キーワード：日常生活の充足　基本的生活習慣の確立　家庭との連携　より自立的な生活づくり

Ⅰ　まえがき

「日常生活の指導では学校における日常生活に，児童生徒がより自立的に，より発展的に取り組めるように指導する.」[1] 形態である．言い換えれば，児童生徒が，一日の生活に見通しをもち，その時に必要な一つ一つの活動を自分の力で行うことができるための指導である．指導は，生活の流れに沿って行われ，登校，用便，朝のしたく（衣服の着脱，持ち物の整理など），係の活動，朝の会，給食，清掃，終わりの会，帰りの支度，下校等の場が設定される．日常生活の指導は，領域，教科を合わせた指導の諸形態の中でも最も基礎的なものであり，したがって，日常生活の指導における児童生徒の活動には，いろいろな領域・教科の内容が総合的な形で含まれている．日常生活の具体的な指導内容は，生活科の内容を基本とし，他の領域・教科に関わった広い内容が含まれる．「例えば，衣服の着脱・調節・整理，洗面・手洗い・食事・排泄・清潔など基本的生活習慣の内容やあいさつ，言葉づかい，礼儀作法，時間を守ること，きまりを守ることなど集団生活をする上で必要な内容等，多様な内容が取り上げられる.」[2]

附属養護学校

Ⅱ　本校における日常生活の指導

本校では，指導の時間を毎日の生活の流れに沿って，一定時間設定，繰り返して指導し，以下の事柄をその指導のねらいとしている．

①健康安全に関する知識・技能・態度の育成を図り，健康の維持増進に努める．
②基本的生活習慣の形成と確立を図る．
③社会生活を営む上で必要な自然現象，社会の仕組みや働きについて理解し生活に役立てる態度や技能の育成を図る．

また，主な指導内容として，次の事柄を挙げている．

○健康・安全・衛生

○基本的生活習慣
○自然への関心と性質・仕組みについての理解
○社会の事象への関心と理解
○集団生活への自主的参加と役割遂行
○社会生活への参加と適応

日常生活の指導では，集団の中での個への迫り方に，より個に即した指導が求められる．個々の児童生徒の生活技能の到達度や実態により目標を定めるが，将来の社会生活，職業生活を見据えて自立へ向け予見をもった指導を進めていくことが大切である．基本的生活習慣は，より効果的な実践を展開するために家庭との連携を取った指導を進めていかねばならないことは言うまでもない．

本校では，小学部，中学部，高等部の一貫性を図りつつ指導を進めている．そのために，「発達段階別指導内容表」を作成し用いている．内容は教科・領域から成り，児童生徒の発達を追い基本的には10段階が設定されている．日常生活の指導の基本となる生活科の内容の中にも生活技能の習得，知識の理解等が盛り込まれている．しかし，段階は標準的なものであり，発達がアンバランスな児童生徒は段階の順を踏まないものも多い．1段階のステップをさらにスモールステップ化し，行動の様式の獲得にいたるメカニズムに則った指導を行わねばならない．

Ⅲ　小学部　基本的生活習慣の確立をめざして

1　はじめに

人としての自立的生活をめざしての教育は，毎日のきめ細かい指導の積み重ねそのものである．多くの児童が発達の未分化な段階にある小学部の教育課程において，日常生活の指導は重要な位置付けにある．

指導の内容は，靴の着脱から下校指導まで幅広い．指導の計画は，学級としての概活的な年間や毎月の計画を基本に，個別の指導を徹底している．今回多くの実践の中から，各学級より三事例を以下にまとめた．

2　指導実践例

（1）排泄機能の成長がみられたK男

①K男の実態

小学部2年生，7歳．染色体異常（猫なき症候群）重度精神発達遅滞で言語理解に乏しく，表出言語は喃語段階である．体幹機能障害，両下肢機能障害のため，始歩が遅く（5：10），入学してからもしばらくは移動の殆どをバギーに頼っていた．現在も歩行は非常に不安定である．このため，膀胱や直腸の出口を閉めている括約筋とそれらの壁をしぼるように働く横紋膜の排泄にかかわる筋肉の発達も遅れていると考えられた．

入学当初は，排尿はすべておもらしの状態であり，パンツを汚しても不快感すら示さなかった．また，自力では排便することができないため，家庭で母親が3日に一度浣腸していた．

②指導経過

K男の発達段階がまだ排泄の機能を統制する筋肉の作用と神経系が完全に発達していない段階であると考えた私達はそのことを両親に話し，下半身の筋力を向上させると共に，あせらず一歩一歩発達のステップを踏んで指導していくことを確認し，学校と家庭が協力してK男の排泄の自立をめざすことにした．

下半身の筋力の向上をめざし，主に次の指導を行ってきた．○朝の体育；リズム運動（毎日5分）校舎外周歩行（毎日400m程）○課題学習；下肢のストレッチ体操（週2回40分）○遊びの指導；八幡神社への往復歩行（週1日3.2km）○その他，日常的に歩く機会を積極的に設けた．

一方，K男をトイレに慣れさせる指導も並行して行った．給食後などK男が排泄しそうな時を見計らい，「シーシー行こうね」など声をかけながらトイレに連れていき，洋式便座に座らせるようにした．泣いて嫌がりすぐに立ち上がろうとしてしまうので，教師が正面に座り，同じ目の高さになり，膝を軽く押さえてあげて体が安定するようにした．座らせている5分間程は，K男の好きなぬいぐるみを持たせたり，歌を歌うなどして緊張を和らげるようにした．一学期末，学校のトイレで初めて排尿をした（H4．7．10）．その後，私達がトイレに連れていくのとK男が排泄するタイミングが合ったり合わなかったりという状態が半年程続いたが，1年生の終わり頃には便座に座ることに慣れ，また歩行力の向上に比例するように，排尿や排便をすることが増えて来た．

2年生になっても定時排泄の指導を続けているが，一方ではK男自身が自分からもトイレに行くようになってきた．H5．7．5には自分から便座に座り，一人で排尿した．またおむつにおもらしをした後，自分でおむつをとろうとしたり，泣いて不快感を示すことも増えてきた．さらに，排便も浣腸を頼らず，自力でするようになった．

このように，入学時はハイハイしていたK男が，歩行力の向上と共に排泄の面においても変化を示してきた．発達の道筋を見極めることの大切さを痛感した．

（2）食生活に広がりを見せたT男

①T男の実態

小学部3年，9歳，身長116cm，体重23kgと小柄な体つきである．揺れる物を見たり，好きな音楽を聞いたりすることが多く，感覚遊びの段階である．新しいことに

対する抵抗感が強く，入学時はよく教室でも泣いていた．着替え，排泄は半介助を要する．また偏食が激しく，家庭，学校共に食べられる物が少なかった．特に朝食は殆どインスタントラーメン，給食はパンと牛乳というパターンが多かった．嫌いな物を食べさせようとすると，声を出して拒否し，給食の時間になると，泣いたり，席を立ってその場から逃げようとした．

②指導経過

1年生の時は，給食時，情緒の安定を図るために別室で教師と1対1で食事の指導が行われた．味覚が少しずつ広がり，食べられる物が増えてきた．2年生の時も引き続き個別の取り組みが行われ，嫌いな物，特に野菜類を一口でも食べてみるという指導の積み重ねを行った．

3年生になって担任が変わった．まず，T男との良い関係を作るために，クラスの雰囲気を温かい，心地好い，安心できる場所にするように音楽をバックに流し，T男がリラックスした状態になれるように努めた．T男にとって，音楽や教師の歌う歌が，何事においても拒否感をなくすための手段になりえることがわかった．そこでT男の好きな歌を探ることから始め，「僕のミックスジュース」が大好きな歌であることがわかった．担任の一人がT男と面と向かい合い，大きな声でこの歌を歌いながらT男を励ました．また，好きな物もある程度食べ，充足してから野菜類を食べるように促した．次第にT男の食事中の表情が良くなり，自然に口を開けるようになってきた．T男がにこにこしながら皆と一緒に食事ができるようになると，他の5人の児童も連動して食事を皆で楽しめるように変化してきた．現在も，好きなパンの間に野菜を挟んだり，ヨーグルトの中に混ぜたり，小さくちぎって好きな物に混ぜたりしながら自然に食べられるような工夫をしている．T男が実際に食べられるようになった食品は，レタス，きゅうり等の野菜類，汁物，煮物，果物等である．

T男の食生活の変化は，経験・人間関係の拡大や音楽の活用と大きく関わりあっていると言える．T男の世界を全面的に拡げることが，食生活への拡がりにもつながっていくことを念頭におき，指導していきたい．

（3）自分から着替えに取り組むようになったH男

①H男の実態

小学部6年，11歳．ダウン症．入学当初は非常に甘えん坊であったが，1年時より母親と電車で通学する等自立への意識は強い．理解言語，表出言語共にあり，（SM社会性活能力検査 意思交換；3-9：H3）教師や友達との会話が成立した．3年生までのH男は「嫌だ」と言ってはすぐに着替えようとしなかった．できないことがあると着替える前から意欲を失っていた．手指の巧緻性が低く，ボタンをかけること等器用にできなかった．

②指導経過

意欲付けには「さあ，着替えよう」といった直接的な声かけばかりではなく，「友達と競争しよう」等投げかけに工夫をした．また，生活全般の中で「自分のことは自分でやる」という意識を持たせることや苦手なことでも嫌がらずに取り組むよう機会ある度に指導を行った．また，できないというコンプレックスを取り除くためにできた時には必ず誉めるようにした．5年生になる頃には1，2度言えば着替え始めるようになり，6年生になると自分から棚から出し，着替えるようになった．また，すぐに「できない，やって」と言わなくなり，自分でどうしてもできない時は「やって下さい」と援助を求めることも自然に言えるようになった．

着替えの技術面では，大きいボタンをはずすことからはめることへ，それができるようになったら小さい物へと移行させた．それと並行してボタンをスナップに替え，目と手，左右の手の動きを協応させる練習も行った．ズボンのホックを掛ける練習も3年生の頃から指導を始めた．また，他の指導場面でも手や指を使い，力をつけることを留意した．4年生後半には大きいボタンが出来るようになり，スナップも一番上以外は自分でできるようになった．さらに，5年生の三学期からはホックの練習に集中し始め，6年の一学期には自分でできるようになってきた．またこの頃，ワイシャツの小さなボタンもはめられるようになってきた．

小さいボタンやズボンのホックができるようになったことは指先の力が増してきたことも大きい．また，より細かい動きでクレヨンを使い絵を描くことや，鉛筆がきでの筆圧等からも手指の巧緻性が高まってきたことが伺える．H男の場合，友達を意識させながら意欲をもたせる指導を展開したことが効果的だった．また誉めることで意欲を引き出した．今後，着替えだけでなく生活全体の中で意欲的に活動させることが必要である．

3　まとめと考察

（1）各個人の的確な実態把握と発達の分析の必要性

より良い実践は，実態の的確な把握の上にある．我々は，生育歴・家庭環境・医学的診断，諸検査等の客観的な資料に加え，我々自身による日常的な観察を大切にしている．それは何ができ何ができないか，何ができそうかという能力的な面のみならず，意欲・情緒等多面的に行い，その上で身につけさせたい力を見極めている．今回の三実践例共，取り組み開始的詳細な実態把握を行い，その後の指導に活かしてきた．

一方，指導をより綿密にするために各能力の発達過程

を十分把握しておく必要性を痛感している．3事例の発達過程を本校作成の「発達段階別指導内容表」の生活科の内容と照合すると，各々段階を上げてきていることが確認された．今後も「発達段階別指導内容表」の積極的な活用をしていきたい．

（2）発達は，総合的なものである．

3事例の実践の経過からも明らかなように，発達は部分的なものではない．「排泄機能と歩行能力」，「食事内容の拡大と生活経験・情緒の安定」，「着替えの自主性と生活意欲，手指の巧緻性」等，単なる一技能の発達に留まらず，他の能力や生活態度，意欲とも互いに相関し，総合的に発達していくものであることを確信した．

このことから，個々について，各指導形態における指導内容の検討も合わせ，常に「学校生活全体から」「将来を見通した」「視点」を見失ってはならないであろう．

（3）家庭との連携の重要性

小学部の教育活動は，日常生活の指導の内容のみならず全てにおいて，家庭との密接な連絡を必要とする．

毎日の家庭との連絡帳，送迎時の担任と母親との会話，学級懇談，学級通信，個人に合わせた補助具等の工夫の依頼等，機会を捉えては相互の情報交換，意志の疎通を深めている．これらの家庭との指導の連携は，三事例の実践上も大いに推進し，その面からも児童の変化をもたらすことができたといえる．また，母親同士の交流を通しての保護者間の連携も強く，指導上意味深い．殆どの保護者が種々の点で積極的，協力的である．

“自分の事を，自分でする” 喜びを共に味わいたい．この願いに向かって，我々の取り組みは続くのである．

Ⅳ　中学部　集団参加の基本的な力を育てる指導

1　はじめに

中学部の生徒18名は発達の個人差・個人内差が大きく性格・行動の傾向もさまざまである．身辺処理能力については，食事，着脱衣，排泄に介助を要し，日常生活習慣が十分形成されていない生徒が大多数である．また集団参加については，友達とかかわりがもてない生徒や集団を意識して行動することが難しい生徒から，少しの援助により小集団のリーダーとして行動できる生徒まで様々である．また，情緒不安定な生徒もおり，不適応からパニックを起こし，集団での行動が困難な生徒も数名いる．

中学部では，小学部で行ってきた基本的生活習慣の確立をめざした指導を踏まえて，学校全体のねらいである集団行動への適応的参加や生活自立へ向けた行動の拡大を図ることを特に留意して，ねらいを設定した．

学校生活の流れが分かり，生活に見通しをもち，進んで身辺生活の処理をすることを願い指導をすすめている．

本稿では，1日の学校生活を始める上でも大切な時間である「朝の生活」について述べる．

「朝の生活」は，登校，体育着への着替え，係活動，朝の会の総称で，同じ内容で繰り返し行っている．

2　3年生の「朝の生活」

（1）朝の生活の流れ

中学部3年生は，男子3名，女子4名，計7名の学級で，明るく穏やかな雰囲気の中で，互いに声を掛け合い助け合う場面がみられ，学級としてのまとまりがある．身辺処理については，女子1名は全介助で，他の6名は確立しつつある．学校生活のリズムも概ね身についているが，女子は動作が遅く，活動に時間がかかる．また，男女共に，人前で話すことが苦手である．

時　間	活　動　内　容
8：45	1．登校 ・日記帳，家庭からの連絡等の提出 ・体育着に着替え
8：55	2．係活動 ・窓開け，電気つけ，花の水替え 予定確認，ごみ捨て ・畑の水やり，教室の掃き掃除
9：10	3．朝の会（司会は日直） (1)あいさつ (2)健康観察 (3)みんなの話（きのうのこと等） (4)先生の話
9：25	4．朝の体育へ

（2）　「朝の生活」のねらい

○時間を意識し，けじめのある生活をする．
○体育着に早く着替えることができるようにする．
○自分の役割を意識して係活動ができるようにする．
○掃き掃除や拭き掃除を丁寧にするようにする．
○人前で自分の考えを発表することに慣れ，正しく豊かな内容で話すようにする．
○人の話を落ち着いて聞き，内容を正確につかむ．
○一日のはじまりとして活動の意欲づけの場とする．

（3）　指導計画

1学期・始業時刻に間に合うように登校させる．
・体育着に早く着替えさせる．
・係活動，朝の清掃，水やりを習慣づける．
・朝の会の順序をおぼえさせる．

2学期・「みんなの話」に重点をおき，話し方の内容の

向上をめざす．
- 「歌」を積極的に取り入れ，楽しい雰囲気づくりをする．
- 気候や体調に応じ，衣服の調節をする習慣をつけさせる．

3学期・時間を意識しながら活動できるようにさせる．
- 自分の役割を果たすことの大切さを知らせる．
- 朝の生活の流れに沿って自分達で進んで活動できるようにさせる．

3．指導実践例

遅刻が多く，行動の遅いE子

（1）E子の実態

身辺処理はほぼ確立しているが排泄をたまに失敗する．簡単な会話ができ，指示も理解できる．人前ではなかなか声を出さず，ささやき声で話すこともある．心臓疾患のため，平成2年度に手術を受け，術後の経過は良好で運動制限などは特にない．動作は遅く諸活動に時間がかかる．係活動はごみ捨て係である．通学については，母親が学校から30分程の距離の自宅から自動車で送ってくるが，始業時刻に間に合わないことが多い．

（2）指導の経過（1学期）

＜登校＞

毎朝，母親に送られて登校してくるが，1・2年生に続いて4月当初は，連日5分から10分の遅刻であった．後の活動に差し支えるので母親に遅刻をしないようにお願いした．その結果，母親に時間を守ろうとする意識が見られるようになり，5月6月と月がたつにつれ遅刻の回数が減り，現在はほとんどない．

＜着替え＞

体育着に自分で着替え，脱いだ制服をハンガーにかけてロッカーにしまうことができる．しかし，更衣室で一人で着替えることが多く，着替えに時間がかかってしまい，その後の「係活動・清掃」ができないことが多かった．そこで，担任は「友達が係活動をしているから早く着替えてしよう．」と声かけをした．遅刻の減少や朝の生活パターンに慣れて，少しづつ着替えが早くできるようになり，その後の活動にも参加できるようになってきた．また，朝の体育で外に出る時体育帽子をかぶること以外に，気候や体調による衣服の調節についても指導してきたが，まだ声掛け等の指導を要する段階である．

＜係活動，清掃＞

係活動は，窓開け係，保健係，畑の水やりの仕事を毎朝，掲示係，ごみすて係，電気係，花係の仕事を随時行っている．E子は，ごみすて係である．当初は遅刻に伴い，着替えに手間取り殆ど係活動ができなかった．しかし，着替えが早くでき，ごみ捨て係の仕事ができるとほめた．何度かほめていくうちにうれしそうな表情を見せるようになった．

毎朝，教室を掃く，廊下を掃く，拭く掃除を行い，清掃の手順，掃き方，拭き方の指導をした．E子は，主に拭き掃除を行った．着替えたら係の仕事をし，教室の掃き掃除をするという毎朝の生活の流れを意識するようになってきた．

＜朝の会＞

朝の会は，日直の生徒の司会・進行で1年間ほぼ同じ内容で行っている．生徒は自分がその日の日直であることが良く分かり，前に出て朝の会の順序を書いた紙を見ながらではあるが，ほとんどの者が司会をすることができる．「みんなの話」では昨日家でしたこと等身近なことを全員に発表させた．構音に問題がなく友達同士では話をするE子だが，司会で前に出たり「みんなの話」で立つと，声が出なかった．担任と一緒に号令をかけるが，僅かに唇が動く程度であった．また，「朝の会」に興味や関心を持って参加しているが，聞く姿勢が悪く，背中を伸ばし，顔を上げて聞くように気が付いた時に即時指導をしてきた．

4．まとめ

「朝の会」は，一日の学校生活をはじめる上で大切な時間である．安定した気持ちで一日を過ごすためにも友達と一緒に活動を始めることは必要なことである．まず最初に，始業時刻に間に合うように家庭に協力を求めた．次に，時間を意識させた．朝の生活だけでなく学校生活の中のいろいろな場面で時間を意識させるような声かけ「友達はもう～しているよ．」「次は～だよ．」をした．その結果，全く自分のペースで活動し，時間を気にしなかったかのように見えたE子が，周囲の友達の動きを見ながら遅れないように活動するようになってきた．同時に明るく積極的になり，以前よりも笑顔が見られ，友達の面倒も見るようになった．

E子の中で学校生活に時間の区切りがあることとそれに沿って生活することの大切さが意識され習慣化されてきたと言える．今後，声かけがなくても，人に遅れず行動でき，それが自信につながり，「朝の会」の司会や「みんなの話」で声を出して堂々と発表できるようになるなど，E子の生活全体に活気が生まれることを望む．

Ⅴ 高等部 社会参加をめざす基本的生活習慣の確立

1はじめに

高等部では，全校的なねらいに即し，学校生活の流れに沿って以下の内容を学習している．

①登下校

登校時の交通規則や交通機関の利用法，タイムカードの使用により，卒業後の会社・施設等の退出の習慣を身につける．

②排泄・着替え・整理整頓

トイレの使用法を身につけ，自分の判断で行く．また，自分の力で着替え，脱いだ衣服をたたみ，制服をハンガーにかけ，ロッカーに片付け，整理する．

③清掃・係活動

分担した仕事に取り組み，責任を果たす．また，掃く，拭く，掃除機の使用等の基本的な清掃方法を身につける．

④朝の会・帰りの会

一日の予定を知り，見通しをもって行動できるように，また，自然現象や社会の仕組み，安全，衛生等についての基本的な知識を学ぶ．帰りには一日の反省をし，その日の出来事等を日記に記入，持ち物や予定の確認をする．

⑤食事・昼休み

三角巾，白衣を着け，時間内に能率よく配膳し，気持ちの良いマナーで食事する．食後の歯磨きの後は，音楽を聴いたり屋外で運動し，余暇の利用を楽しみながら学び，気分を発散させる．

⑥礼儀作法

年令に応じた言葉遣いや挨拶，対人のマナーを学ぶ．

卒業後の社会的な自立に向けた取り組みを以下に記す．

2．指導実践例

（1）集団参加の難しいK男

新入生の多い1年生のクラスで，特に配慮した点は，生徒個々が高等部の時間の流れにそって行動できるよう朝の帰りの会で予定を明確に示したことである．また，生徒同士理解しあい，関わり合って，持てる力を十分発揮させたいと考えた．ここでは，集団参加の点で問題の多い公立中学校からの進学生K男について述べる．

①K男の実態

中学校時代，普通学級に籍を置く．穏やかな性格であるが集団の中に入れず，登校しても教室の外で一人で過ごすことが多かった．また自分の気に入らないことに対しては絶対に受け付けないところがある．家では家族と普通に会話を交わすが，学校生活の中で話をする事はほとんどなく，返事は微かにうなずく程度である．

現在，父，母，姉の4人家族である．3人とも日中仕事を持っており，下校後，地域の数歳年下の小学生と遊ぶこともある．健康面では，生まれて間もなく胆道閉鎖の手術を受け，母親は甘やかし，過保護に育ててしまったという．現在も毎日成長ホルモンを注射し，抗痙攣剤を服用している．

②指導の経過

高等部に進学し，それまでと比べ彼をとりまく環境は時間的，空間的，対人関係面でもより密度が濃くなり，対応を迫られる場面が増えた．しかし，入学当初には，中学校から申し送られてきたことが，そのまま行動に現れていた．指示に従わなかったり，知らない内に教室を抜け出し隠れてしまったりすることが頻繁に見られた．自分をとりまくクラスの仲間や教師が，どのように自分に接するか様子を伺っていると思われる状態であった．

彼の状況から以下の点に問題があると考えられる．

ア．身近な人と自分との関係を知り，親しみを持って簡単な意志交換をする．

イ．家庭や学校における集団生活に参加し簡単な役割を果たす．

ア．については，成長の過程で当然獲得されているべきいくつかの人間関係のひな型が用意できておらず，自分と相手との関係を把握できず，指示を理解し行動をもって反応することや，場にふさわしい行動をとることができないと考える．

イ．については，小さい頃から病弱であったため本人の健康状態を意識しすぎ，家庭での簡単な役割分担をさせなかったためと考えられる．小学校時代どの子も経験したであろう事象についても想起できないことが多い．

また，コミュニケーション，役割の面から発達の段階をみると，声をかけられたり，拘ってもらえると喜び，教師の励まし指示があれば簡単な係活動，作業を行える段階にある．指導に際しては，きびしく接することは避け，より多くの教師と親しい人間関係が結べるように心がけてきた．また指示や，クラスの中での活動は段階を追いながら本人の納得できる目標を立て，その都度励ましを与えながら一緒に行動してきた．そのような中で次第に親しみを表す行動が，さまざまな人との間で見え始め，言葉による意志表示も増えてきた．そして高等部のみならず全校児童生徒と共に活動する場に参加できるようになった．

③まとめ

K男は，これまで集団・社会生活経験の乏しい状況であった．本校に進学し，今迄の学校とは異なりリラックスした人間関係や環境のなかで徐々に活動を始めている．学校生活を通してさまざまな社会経験を拡大させ，学校，家庭での役割の分担や人との関わり方の基本を学習させていくことが大切であると考える．これらのことを通してK男が社会の一員として自立した生活ができるように意識・行動の変容を図っていきたいと考える．

（2）社会性の高いJ子の不適応行動へのアプローチ

高等部2年生は，日課表に位置付けられている日常生活の指導の時間帯は変わらないため，順序生の定着や習熟といった成果を上げている．しかし身辺処理の技術的なことや場に応じた適切な判断ができにくい等の課題を抱えている生徒が多い．ここでは，将来，一般就労が可能であろう高い社会性を持ちながら，不適応行動を起こすJ子について述べる．

①J子の実態

一見，非常に社会性が高い．身辺処理はもちろん，場に適した行動ができ，敬語なども適切に使える．他人の気持ちを読み取り，心配りもほぼ万全にでき，クラスの中では圧倒的な発言力，影響力を持つ．友達などに理にかなった説教をすることが多い．言語や身辺処理が不十分な友人に対して面倒見がよい．一方，精神的に不安定になると，故意に脱糞をしたり，更衣室等で排尿する．友人の物を盗んだり隠したりする．人より目立つことを好み，特異な身だしなみをしたがる．虚言癖がある．

② 指導の経過

J子の担任となった当初は引き継ぎは受けたものの，望ましい生活習慣が確立しており，そのような課題があるようには見えなかった．ところが一学期前半に更衣室での排尿が立て続けに三回あったことをきっかけにJ子の色々な部分が見え始めた．特に三度目は現場実習の前日で，翌日，実習先にスカイブルーの髪飾りと四個のブレスレットをつけて現れ，J子はかなり緊張して現場実習に臨んだのではないか，自分を支えるものとして髪飾りなどが必要だったのではないだろうかと考えた．また家庭との連携の必要性を感じ，母親に学校に来てもらい，家庭での様子などを話してもらった．

J子は普通小学校に通学し，遅れがあるため友達から疎外された．時折，大便を鞄の中に入れ，クラス中大騒ぎになったこともあったという．J子と対等な関わりを持とうとしない父親．命令と禁止の多い母親．致命的な言葉を浴びせる弟達．母親の話から，J子は幼い頃から自己顕示欲が満たされることなく成長したのではないか，鞄に大便を入れたことも騒がれることが嬉しかったのではないか，一方，空想の中でかくありたい自分が膨らんでいき，現実と虚空の区別がつかなくなり，それが虚言癖となったと思われた．J子の不適応行動の成立は必至のことであったかも知れない．そしてそれは，J子の生育歴に裏打ちされた頑固なものなのである．母親には家庭の中でJ子を認める場所をつくる様，要望した．

J子に指導したことは意図的なアドバイスをしながら話を聞いてきたことだけである．その際，J子自身が最終的な結論を選んだ形にすることと，本当のことを話す様心配りをしてきた．せめて嘘のない関係を結びたかったことと，J子が自分で気づかなかった精神的ストレスを二人で確認したかったからである．

③ まとめ

一見ほぼ完璧にできているようなJ子の不適応行動は，表出される形は様々だが，根の部分は一つで，生活環境からくるストレスなのだと思われる．そしてその表出手段はJ子の生育歴からJ子が選んできたものである．そんなJ子に更衣室での排尿はいけないと，あるべき規範をおしつけることでは決して解決にならない．

ボディイメージが貧困な生徒に体の統制や操作が困難なように，精神にもそれと同じことが言えるであろう．J子の表出された不適応行動を手掛かりにJ子自身の心を知る作業の手助けをし，彼女の選択肢の中に適切な方向を提案していきたいと考えている．

（3）自己表現が未熟でスムーズな動作に欠けるH男

高等部3年生は社会に参加すべく，今まさに学校生活の出口に立たされている．本校の「発達段階別指導内容表」の基本的生活習慣や，交際，手伝い，役割等の項目についても9．10段階の内容，つまり円滑に社会生活を送るための学習を進めている．ここでは，成長発達に偏りが見られる生徒に役割の指導を通し変容を迫った経過を述べたい．

① 生徒の実態

H男は，軽度の精神発達遅滞帯だが就労は困難な状況である．友達の後ろに常について行動し，一人の時は何もせず体を固くして椅子に座っていることが多い．食事では，食べ物をこぼしたり，口いっぱい食べ物を詰め込んだりする．着替えの部屋から，ボタンをかけ違い，シャツをはみ出しながら飛び出してくる．何事にも気負いが大きくがむしゃらに突進するか，自分の殻に閉じこもるという両極端な面を見せる．家庭では父親は厳格で母親は過干渉気味．弟はH男を嫌う．H男は，物を投げたり壊したりするパニックをしばしば起こしている．

② 指導の経過

何事にも受け身で自信がなく，自己表現が未熟でスムーズな動作に欠けるH男に対し，「一人でできる係を作り役割を果たすことを目指せば，自信がつき，主体的に係活動と取り組めるであろう．」という指導仮説を立てた．留意点として，H男に与える係の内容は責任性が強く問われ，友達に一目置かれることでH男の自尊心を満足させ，かつ単純な作業であること，また，生活スキルで落ち込んでいる課題をクリアーさせるために，手指の巧緻性を高めるような訓練をさせることをねらった．

そこで，高等部の非常階段の鍵の開閉と，鍵の管理をさせることにした．早速H男に話すと「やってみる．」とう答が帰ってきた．うれしそうな様子で，きっかけを

待っていたかのようだった．しかし，最初は忘れることが多く，注意すると体を固くして逃避することが続いた．そこで登校して鍵を開けるまでの流れと，帰りの支度を済ませ鍵を閉める．という流れを一緒にやりながら説明してパターンをつくることにした．その結果「鍵をかけて.」と頼むと走って鍵の係の仕事を終え「やりました.」と報告するようになった．

また，清掃の仕事も一人だけでトイレの清掃をさせることにした．教師がそばにいると，わかっていることも一つひとつ聞かないとできない状況であったので自分の力だけで清掃させるために，手順を書いた紙を壁に貼りそれを見ながらやらせるようにした．床の掃き方，便器の洗い方等技術的には，問題があるのだが，一人でやり切ることに主眼を置くことにした．

さらに，靴の紐結びや，鉢巻きも一人では結べない等を改善するために，朝の生活等で紐結びの教材を使い訓練をさせた．1か月程で紐が結べ，鉢巻きを一人で結んだ時は飛び上がって喜んだ．

この頃では，鍵の開け閉めも確実に任せておける様になった．いつも友達の言いなりになっていることが多いH男だったが，最近自分の意見も時々言うようにもなってきた．

③　まとめ

役割を果たすということが，家庭では，自分の居場所と存在を明らかにし，家族関係にプラスの方向で変化をもたらせる．また，社会生活を営む上でも，仕事への主体的な取り組みと人間関係の潤滑油になるだろう．表情と明るさが見え，頼まれたことも，以前よりスムーズにできるようになったが，まだ受け身の姿勢で，進んで体を動かしたり，関わったりすることは難しい．今後も手指の巧緻性を図りながら，生活スキルを高め自分に自信をつけさせたいと考えている．

3．まとめ

高等部卒業後，実社会に巣立ち，社会の一員として生活していくために学ぶべきことは多い．中でも基本的生活習慣は最も必要とされることである．高等部迄に形成された生活習慣をより確立させるために，卒業後の生活を見据えながら取り組んでいきたい．特に，礼儀作法・あいさつ・言葉遣い・時間や決まりを守る等は社会生活の基本となることである．設定された時間の中での指導のみでは到底徹底していくことはできない．今後も，家庭との共通理解の下，生活の流れの中で適時，指導していかねばならないと考える．

Ⅵ　まとめと今後にむけて

本校の教育課程の大きな流れとして，小学部では身辺処理力の確立，中学部では集団参加の力の育成，高等部では卒業後の社会生活の自立をめざしている．この流れに沿って，三学部12年間を貫く教育課程に最も基本的な指導形態として位置付けられている「日常生活の指導」をとおして実践を述べた．

小学部では，日常生活の中でも最も基本的な排泄，食事，着替えの指導を，中学部では，朝の会をとおして集団活動への積極的参加を，また，高等部では社会自立へ向けた取り組みとして大きな集団への参加，不適応行動の改善，主体的な自己表現等について日常の実践を記した．入学時に未確立であった身辺処理は，家庭との連携をとった指導の下に徐々にではあるが確立に向けて進んでいる．さらに，「日常生活の指導」をとおして社会生活に必要な集団生活への参加に関する内容や，礼儀作法，身だしなみ，社会の決まりなども学習することとなる．

その力をより高めていくために，基礎となる概念の獲得や，体の動きの改善を図っていく指導を，全教育課程をとおして終始一貫した対応で行っていかねばならない．そのために，「発達段階別指導内容表」を活用しながら，児童生徒が意欲的に取り組めるような援助が必要である．児童生徒は，さまざまな発達の要因が絡み合って総合的に成長していくことを報告された実践例からも知ることができる．今後も，指導・評価・計画のサイクルで指導を進め，児童生徒が，自分の手で，力で生活することをめざして，家庭と連携を取りながら当たっていかねばならない．

参考文献

文部省　日常生活の指導の手引き　昭和62年文部省
文部省　特殊教育諸学校高等部学習指導要領解説――養護学校（精神薄弱）――平成4年　文部省
小出　進　講座発達障害　指導法　Ⅰ精神遅滞　1985　日本文化科学社

註

1）日常生活の指導の手引　昭和62年　文部省　p．3
2）特殊教育諸学校高等部学習指導要領解説　養護学校（精神薄弱教育）編　平成4年　文部省　p．157